中川根ふる里通信

＝第84号＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町上長尾849-6
TEL 0547(56)-0015 FAX (56)-0020

台風四号＝七月十五日＝
大井川大洪水

写真上、長島ダム洪水吐二門より一、五〇〇㎥/sの水を放流（十三時頃撮影）
右、中徳橋より下流大井川満水を撮影
高郷、梅島下地区を飲み込む勢い、

緊急特集・台風四号と大井川

七月十三日～十五日にかけて、日本列島を太平洋沿いに通過した台風四号は、この時季最大級の勢力となり、風雨共に強力で、梅雨前線をも刺激して、各地に甚大な被害をもたらしました。幸いにも川根地域には大きな災害は発生しなかった様子でしたが、（降雨量の多かった寸又川水系上流部など知るよしもありません。）大井川は希に見る大洪水となりました。しかも満水状態が異常に長時間続きました。写真撮影をしましたので、その様子をお知らせします。又、この機会に過去の大洪水の状況も省みたいと思います。

＊大井川とその周辺の降雨量は

台風四号の上陸や予想進路となった九州各県が大雨の時間が長かった為、各地に被害が発生した頃も、こちらはさほど大雨と言う事もなく、むしろ風害、高波害が心配されていました。大井川も、近くの支流（長尾川・中津川など）も増水されず安心していました。ただ十日頃から上流部（榛島）は近へ魚釣りに行った人が、一気に水面の上昇を体験、ダムが放水をはじめたらしいとの情報も入りました。

十四日は"平谷の流し樊"の日、夕方の行事はどうなるのか、なて、と考え、『この分なら、水量も多いし、塩郷堰堤も全開だろうから、流し樊は海まで届き、水を鎮める津島神社にご奉納成りそうだ。めでたい。』と、楽観していました。が、心配はありました。標高川水源のホーキ薙が、少しの雨でも崩れ、多量の土石流を排出する事と、天気図から南アルプス南面とその前衛の山々に台風の雲がかかり、大雨が降る予想だった事です。

夜になり本格的な雨となりましたが、風も強くならず、台風接近にしては静かで、進路予想図をテレビで見ながら、『明日は遠州灘沖かも知れない』と思いつつ眠りました。夜中、雨風の恐怖に起こされる事なく十五日の朝となりました。

十五日、日曜日、ゆっくり起床、テレビのスイッチを入れると、未だ台風の中心は伊勢湾南海上にあり、お昼前に静岡県に最接近するとの事に、『未だ！これからが本番！』と家の周囲を見てから、大井川を見ますと、もう大変！大洪水となって、川面は大波が立ち、川幅一面、もりくり上って濁流が流れています。思わず『写真だ！』と、カメラを持って大井川にかけよりました。朝八時頃の事ですが、その時は、雨は小降りとなったり、時おり、強い風と横なぐりの雨が降っていました。

荒れくるう大井川を真近に見て、シャッターを押しつづけましたが、『この水は、どこで降った雨なんだろう？』、『南アルプスに急に降って増水？』『まさか、ダムの放水による増水では・・・』と、今にも飲み込まれそうな濁流を見て考えました。

十一時頃になると、雲間に青空も見えはじめ、台風も通過し、急に天候が快復して来ました。今日は、寸又峡の望月さんの所へ行く予定があり、道を心配して、問い合わせたところ、通行出来ますとの返事をいただいたので、冒険好きな息子の運転でお掛けました。途中、写真を撮ったり、川を見たりして行きますと、電光掲示板に"長島ダム放流中"が二ケ所目に付きました。「長島ダムに直行してね」とたのむと、承知してくれました。洪水時の放流を見るのは、初めてです。胸が高鳴って来ます。所々に、沢の増水による土砂が、道路上まであふれ出て、元藤川、小井平より北は、道があれて、より強い降雨とであったようです。以下写真を載せます。

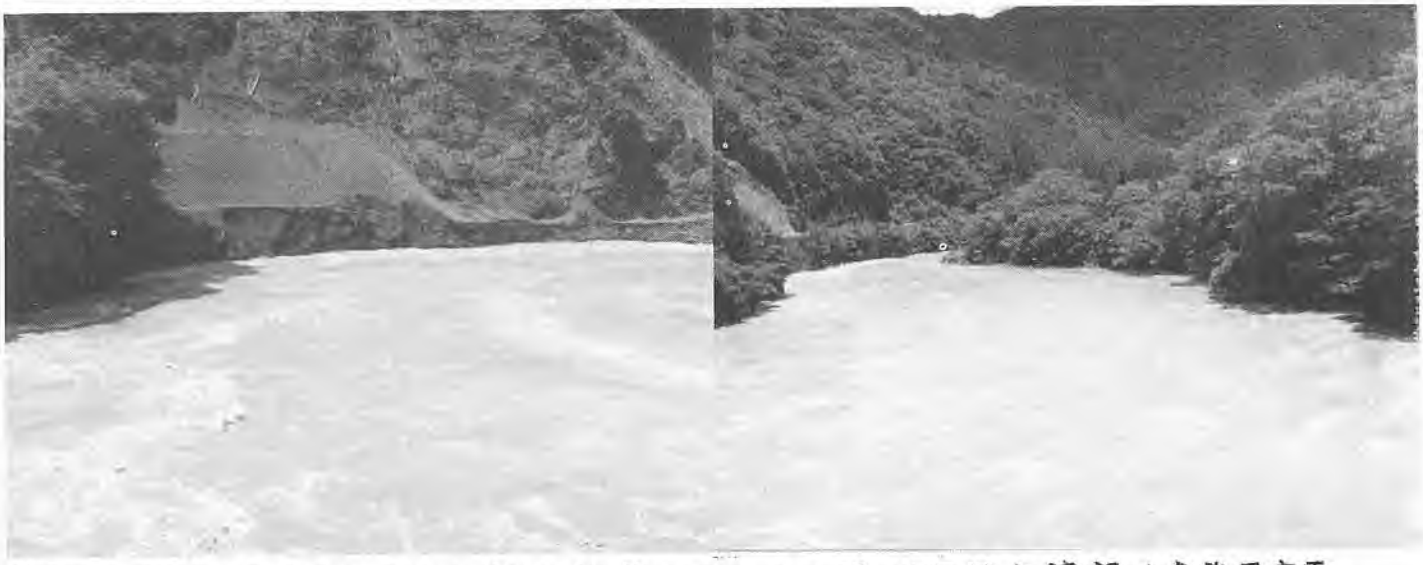
↑7月16日朝8時ごろ. 右写真と同所にて撮影. 水勢もやや おだやかになるも満水状態. 堤防石積も出て、3m位水位が下っている.

↑7月15日朝8時ごろの、高郷前. ミツ星キャンプ場より. 上流部を望む. 橋は中徒橋、河川敷堤防にて

→徳山内水排水路が、大井川の水位が上がった為滞流をおこしている様子 第一小学校横、水位がもう少し上がると運動場に入水する。

↑中津川河口より大井川へそそぐ様子. 中津川の水量は、多くない. 高郷堤防より. 左手は高郷内水吐水

↑元藤川の榛原川河口の様子. ↑旧橋より上流. ←中部電力導水路取水口. 上流に大崩壊地があり土砂と泥水の排出が大きい。←は新橋より大井川への注ぎ口を望む、土砂と共に流木もある。



↑.桑の山トンネルを通ると、すぐ大井川に鉄橋がある。その橋より右は上流部八木地区方面。左は下流部を写す。川幅が せまいので、濁流が盛りくり上って走っている。左、中央部は、崩壊地で、岸を波がけずり、音をたてて流れさる。

13時頃の長島ダム、6門の洪水吐の内、2門が作動中。初めて見る放水は圧巻そのもの。

ダム天端から放水の様子をのぞく。左端、右端から放水、約80mの内に6門の洪水吐があり、最大放水量は1門約1000t/s。つまり、毎秒、6,000tの放水能力をそなえているとの事。今回の長島ダムにおける洪水吐放水量は2門合わせて1500t/s。もし、2000t/sの放水をしたら、千頭駅付近、本川根中学校・徳山地区、などは、完全に水没していたであろう。恐い光景を写し早々に立ちさった。

ダム天端道路より、ダム湖を見ると、湖面は鏡の様に静か、波すらたっていない、不気味な世界。

寸又峡温泉手前の朝日トンネル、直前の栗代橋を望む地点より濁流の左手寸又川・右手橋下は支流栗代川である。この付近の県道は、寸又川の川床上昇により、度重なる浸水被害があった為、道路を高く、トンネルをほって対応している。もちろん、今度の出水の時も、旧道路は流れにさらされていた。

栗代川も大無間山や大根沢山などを水源とした大河川で、合流点の水量は、本流に勝るとも劣らない様子だった。洪水の時だけが表わす、本来の川の姿である。その寸又川は、さらに勢いを増し、土本地点で大井川と合流します。

3,000m から数えきれないほどの沢や川を呑み込んで流下する大井川と、2,600m から又、何百もの沢川と合流した寸又川とが一川大井川になり、その後も数えきれない沢や川が流入して、一気に駿河湾に流れ込む大自然のパワーに、改めて、驚異を感じた。

大型ダムの洪水時の対応への期待と不安

大昔から大井川の洪水はくり返し、くり返しあり、大量の土砂を上流から下流へ運ぶ営みは、自然のサイクルに人間の英知が従うようにある時には工夫し、ある時には静観し、ある時には逃げて来ました。

川根地域の洪水の歴史に残るお来事があります。それは、今から約二〇〇年前、江戸文化の花開く文政十一年六月三十日～七月朔日（旧暦にて、新暦では約五ロ日をたすと八月下旬）大井川の川幅が倍に広がるほどの大お水があり、下流域に甚大な災害をもたらしました。世にいう予年（よねどし）の大水がです。大井川が増水した上に、水川（みずがわ）川下流に土砂崩によって川が堰止められ、大きな湖がその上流にお来ていました。そこに大雨が降り、堰はくずれ、たまった水は、鉄砲水となり、一気に流れ、満水の大井川に押し出しました。下流では、予測のつかない土石流の大被害を受けました。もしも水川の鉄砲水が無かったら、これまでに大きな災害にはならなかった気がします。

昭和三十年代、大井川にも上流部に井川ダム（水系最大貯水量）畑薙第一ダム、中流に塩郷堰堤がつくられ、洪水の様子が変わって来ました。通年大井川は水無し川と化し、洪水の時だけ大水が流れる様になりました。

昭和三十四年には、伊勢湾台風など大お水が二回あり、建設中の塩郷堰堤が流お する事態となりましたが、高郷、上長尾地区は浸水はしませんでした。ところが、塩郷堰堤完成後は、堰堤上流部は川床が上がり（堰堤は水と共に土砂をも堰止めてしまう力がある。）大雨が降る毎に、浸水被害がおはじめました。昭和四十年から五七年まで、七回、保育園も水没しました。その一因に井川ダムからの放水があります。当時このダムは洪水調整機能も持っているとのキャッチフレーズでしたが、下流部では、放水による、一気に一メートルも水位が上がる事が最大の恐怖でした。

平成十四年水系第三の大型ダム、長島ダムが完成しました。このダムは洪水調整機能をそなえたダムですが、完成前に、恐ろしい大水害をもたらしています。一つは、平成三年九月十九日、井川ダムの放水がもとで、建設中の仮ダムが水勢に耐え切れず、ふっとび鉄砲水となり一気に流下した。二つ目は平成十二年九月十日、完成まじかな長島ダムの堤体に上流部から木材と放水が押しよせ、ダムを乗りこえ、木材と濁流が土石流ならず流木流をおこした事は記憶に新しい事です。洪水の予測の対応は、大変な危険をともなう大井川である事を肝に命じてほしいものです。

「南太平洋の戦い」

元海軍飛行兵曹長　諸田君平

＊三十年ぶりの元隊員との再会

昭和四十七年秋「七〇五空会の総会を行なうから」との同期生松村豊君からの便りに接し、夢かとばかりに驚くと同時に、喜びがこみあげて参りました。胸をはずませ、飛び立つ思いで靖国神社へと馳せ参じました。先輩戦友諸氏と感激の対面をし、生きる喜びをかみしめた思いは、今も忘れることができません。

四十八年六月の淡路島でおこなわれた『七〇五空戦史編纂打合会』に参加、何の記録もなく、又、記憶にも自信が持てず思い悩みましたが、後世に残る思い出の記をと考え、当時を回想しつつ、拙ない文を綴りました。

勿論、記録をもとに書いたものでないので、多少の喰い違いはあると思いますが、出来得る限りの研究や先輩諸氏のお話をも綜合し、ここにまとめました。

＊予科練卒業・南方進出

昭和十五年六月一日、大空への夢に燃え土浦航空隊に入隊、厳しい海軍精神注入の猛訓練に耐えていた吾々は、十六年十二月八日未明の、日米開戦の報に、いよいよ、来るべきものが来たと、若人の血湧き肉躍るの感がありました。

この月、練習課程をすべて終了、暮れの三十一日、卒業と同時に、北海道に本隊を置く美幌航空隊転勤を命ぜられました。しかし、本隊七〇一空は既に開戦と同時に、仏印のサイゴンに進駐しており、吾々も目的地サイゴンへ向うことになりました。

「東京発、九州にて船を待て」の連絡を受け、翌十七年元旦は、佐世保港仮兵舎で、サイゴン行きの船を待ちました。同期生で七〇一空配属は、確か十一名であったと記憶しています。

佐世保から広徳丸と言う貨物船に便乗し、故国を離れたのは、一月中旬でした。内地の山々が小さくかすみ、愈々戦場へ赴むくのだと感じた時、果して、生きて再び内地の姿が見られるかと、思いがよぎり感無量でありました。

台湾、海南島を経てサイゴンに着いたのは、天候にも影響され、二月になってからであった。驚いた事には、他の部隊に配属され、いち早く飛行機で飛んだ同期生が、早くも敵攻撃に参加し、帰らぬ人となり、遺骨の箱と写真で出迎えてくれたことでした。いよいよ戦場に踏み込んだという実感がひしひしと身に迫り、心の引き緊る思いでした。同期の友に決意を誓いました。

＊敵潜の洗礼・本隊合流

吾々がサイゴンに着いた時は、既に本隊はマレー半島コタバル基地に転進していました。悶々の幾日かをサイゴンで過ごし、再び貨物船で目的地に向った。若い吾々同期生は、船の中でも、寸暇を惜しんで一生懸命励みました。

二日目の夜半、突如、敵潜水艦の襲撃を受けました。悲しいことに、無防備の貨物船のため、切歯扼腕したが、敵潜二隻は浮上し、探照灯で照らしつつ、貨物船の無力をあざ笑うかの如く、攻撃を続け、最後に魚雷を発射し、悠

怒と波間に姿を消した。散々の目に遭った吾々は、やっとの思いでサイゴンまで引き返し、九死に一生を得た。そこで本隊より迎えの飛行機が来たので、漸く本隊に合流することができました。

当時日本軍は破竹の勢いで転進に次ぐ転進を重ねていて、マレー、スマトラ、ジャワと快進撃を続けていた吾々は、戦争の凄まじさと同時に、南十字の星の下で眺める南国特有の風土民族等を、緒戦の連勝連勝の余裕の中で味わうことができ、南国の香りや夜のすばらしさは、三十年を経た今日でも記憶の中に生き続けています。特に印象強かったのは、マレー半島サバン島のマラリヤ・デング熱の猛威、ジョクジャカルタペナン島の南国の香りなどでした。

当時マレー・スマトラ島の基地を転々と進駐、印度洋索敵哨戒を連日黙々と行なった吾々は、東南アジアの比較的楽な戦いをしていたように思う。南太平洋方面の戦局が悪化して、一時、内地木更津航空隊に一期間帰ったが、再び南方ソロモン方面へと飛んだ。

＊ソロモンの激戦

ソロモン群島の戦いは激烈を極めていた。ラバウル基地につくや基地では、ガダルカナル進駐の作戦が真剣に練られているようでありました。私達もガダルカナル島進駐に備えていたが、急に取り止めとなってしまいました。

それからは、連日連夜の哨戒索敵、ガダルカナル、ポートモレスビー攻撃に加わった。主として昼間飛行の方が多かった。しかし、この昼間攻撃も米軍第三、第四、第五飛行場がガダルカナル島に建設されるや、最早、昼間攻撃は困難を極めました。損害も又甚大となり、夜間攻撃に変更され、吾々も夜を待って攻撃に飛び立った。やがて、米軍の物量に物をいわせた作戦で、我が方の損害も次第に多くなり、戦況は必ずしも、日本軍に利あらずの状況となって来ました。それでも、ガダルカナル、モレスビーの攻撃は、繰り返し、繰り返し続けられました。

当時、我々の飛行長であった桧貝方佐はレンネル島沖で、三原少佐も相前後して戦死されました。両飛行長とも海軍航空隊の至宝とまでいわれた方々で、非常に惜しまれてなりません。

連日の空中戦で我が軍の消耗も激しく、七〇一空は、戦力低下し、十八年三月に現地解散し、七〇五空（青森県三沢航空隊）に吸収されました。

当時は七〇一空は九六式陸攻、七〇五空は新鋭の一式陸攻であり、吾々も一式陸攻訓練の為、サイパンに後退して一期間訓練飛行に励んだ後、再度ラバウル、ブナカナウ基地に戻りました。

夜間飛行も以前とは米軍兵器技術に格段の進歩があり、目的地上空には、必ず敵夜間戦闘機が待ち構えていた。基地上空へ達すると、何十本と云う探照灯のお出迎えに会った。一度とらえられれば、得たりと、夜間戦闘機が攻撃をかけてくる。高角砲も正確度を加え、雲上飛行でも電探攻撃で初弾命中もあった。従って、後下方での爆発には恐怖感はないが、前方で破裂すれば、精神的恐怖感に襲われ、一度の攻撃でも、肝っ玉が上ったり下ったりの連続であった。

高い高度であるので、下界を眺めれば、夜の下界は氷の国の様な感じがした。もう、生と死の間をさまようというより、死の世界を漂っている――というような表

現が、ぴったりした感じでありました。

哨戒索敵、昼夜の発進も、この頃になると、随分緊張したものである。確か、ラバウルを発進し、ツラギを通り、ガダルカナルをかすめて引かれた索敵線は五番線だったように思うが、吾々は、死の索敵線と呼んでいた。索敵中「吾、空戦中」の電報が入れば、無事帰還は望めない状態となっていました。

攻撃にしても、索敵にしても、未帰還機の帰りを待ちながら、もしや!!と思い、食卓番が、そのまま片付けもせず、涙ぐんで、いつまでもいつまでもじっと待ち続けていた姿を、幾度も見たものでした。

雷撃戦になると更に悲惨であった。一ケ中隊九機が出撃して「ト……(突撃の意味)」を連送後は送信を絶ち、生還できるものは奇蹟とまで言われていた。兎に角、筆舌につくしがたい凄まじい消耗戦でありましたが、戦局は我に利あらず、日に日に重大さを加えていきました。

この戦局に山本連合艦隊司令長官自ら陣頭指揮の為、ラバウル航空隊基地に来られ戦爆連合の攻撃に御見送りをいただいた事を思いおこします。その後、私達の中隊、二小隊一番機小谷機、二番機林浩機が長官及び幕僚と共にラバウル基地を発進し、あの余りにも有名なブーゲンビル島ブイン上空で襲撃され、戦死をとげられた悲しい出来ごとが、私共の悩裏に焼きつき、今になっても忘れることができない。

戦後三十年たった今日、山本長官二番機只一人の生き残りであるパイロット林浩氏とも再会、七〇五空会の晩、同室で当時の思い出話を語りあい、いろいろとお話を伺いました。

また、直援機だった零戦六機の中の一機に搭乗されていた

ラバウル航空隊基地にて、零式戦闘機を見送る山本長官。

日本海軍96式陸上攻撃機(96式陸攻)
701航空隊の所属機。

96式陸攻は、乗員7名、特徴として、垂直尾翼2枚、前輪が半分出ている。日中戦争から太平洋戦争初期まで活躍、中国重慶爆撃は有名。　昭和16年12月10日、マレー沖海戦

↙にて、1式陸攻と組んで、イギリス戦艦プリンス・オブ・ウェールズ巡洋戦艦レパルスを撃沈させ、飛行機戦の強さを知らせた。

零戦パイロット生き残りの柳谷謙治氏（同期生）とも四十八年十一月三日、予科練慰霊祭（土浦）でお逢い出来、いろいろ思い出話に花を咲かせました。今、生きる喜びをしみじみかみしめ、同時に花と散った戦友を憶い浮べ感無量でありました。

ラレ島の敵夜襲

昭和十八年五月、山西司令率いる七〇五空は、ラバウル基地より保有機を集めバラレ島に進駐、ガダルカナル島攻撃索敵につきました。吾々の分隊長は飯島大尉でありました。バラレ島は山さない小さな島で、滑走路二〇〇〇米を取ると、島の端から端まで一ぱいの島です。あとは椰子林で、ひっそり身をかくした兵舎が点々とある航空母艦並の島でした。

吾等野村分隊、飯島分隊十八機が、ガダルカナル島に攻撃をかけ無事着陸すると、それを待っていたかの様に、送り狼B17の大編隊が襲いかかり、アッと云う間に、この小さな島全体に、爆弾の雨を降らせ、逃げようにも逃げ場はなし、爆弾の風を切る異様な音と共に、身を伏せたとたん、直撃で体はふっ飛び、着地と同時に土をかぶって、生き埋めになっていたが、幸いにも無傷で助かりました。ようやく宿舎に帰り、お互いの無事を確かめ合いました。

夜になって、士気昂揚の為分隊会を行う事になり、酒肴を集めて、盛大に行い、数時間前の空襲も忘れたかのように大いに飲み、無礼講と云う事で、小生等も大いに酔い、知らぬ間に、深い睡りに入っていました。

何時間位眠っていたのか、突然の爆発音に驚いて飛び起きた。外を見ると海の方から射って来る、艦砲の弾道がよく見える、ターン、ヒューン、ドカーン、凄じい艦砲射撃である。大急ぎで防空壕へ飛び込んだ。その壕たるや貧弱なもので、急造の地面を少し堀って、その上へ椰子の丸太を二重にし、つみ重ねただけの、何ともたよりないものである。それでも全員壕に身をかくし落着いたところで外の様子を見学してみると、照明灯で飛行場は明るく、燒ける飛行機の炎は真赤で、何とも物凄いものだった。爆撃も恐しいが、艦砲射撃も、爆弾とは違った恐しさで、両方ともいやと云う程知らされたものだった。

攻撃の嵐が止んだ後、夜の明けるのを待ちかね、手探り同然で、飛行場まで一生懸命走った。昼間の爆撃と夜間の艦砲射撃で、実に丹念に、何もかも吹っ飛んでいる。この時態に、志岐整備長の人間離れした指揮と、整備員の生命をかけた整備作業が行われ、こわれた飛行機より

ニューブリテン島ラバウル湾上空を飛行する1式陸攻
ラバウルの象徴の花吹山もよく見える。
1式陸攻の乗員は7名、形は、胴体がふとい葉巻型、主翼内に燃料タンクをそなえ、4000K㎞以上の長距離飛行が出来た。終戦まで主力爆撃機として活躍した。705航空隊のしるしは300代で、上部写真360機も705空所属のものと想像される。

日本海軍1式陸上攻撃機（1式陸攻）
705航空隊の所属機、山本長官を乗せた1式陸攻の垂直尾翼番号は323。昭和18年4月18日墜落

部品を集めて、何機かを飛行できる様に、復元された事を思います。バラレに進駐した戦友で何人現在生き残っているか、知る術もないが、当時の思い出を、尊い生命の思い出として、じっと胸の中にしまっている方が、一人でも多い事を念じて止みません。

此の度の七〇五空隊戦史には、さまざまな激戦模様も、数多く載る事を思いますが、ラバウルを中心とした攻防戦は、数後の今日でも、吾々日本人の平和への願いに、大いに役立たせていただける事と信じています。

＊印度・カルカッタ攻撃

開戦当時七〇一空時代の思い出の地マレー半島のサバン島、ジャバ島、ジョグジャカルタに再び戻り、印度洋の索敵哨戒に連日飛び立っていた。十八年八月十一日、「印度カルカッタ英軍基地、港湾施設を叩け」との命令で、我が式陸攻九機、護衛零戦は二十七機でサバン基地を飛び立った。途中、ビルマ陸軍飛行場基地に一泊、柳瀬介になり、歓待された事を覚えています。

翌朝、勇躍ビルマ、トングーン飛行場を飛び立った。何時間か前に、陸軍重爆隊が、同じ目標に飛び立っているので、英軍戦闘機隊が待ち受けている事は解り切っている。英軍戦闘機との空戦は始めてである。緊張と大いなる斗志が湧きあがる。

カルカッタ市街が目に入ると、いるいる、スピットファイアー、ハリケーン戦闘機が群がっている。直ちに零戦隊は、物凄い勢いで戦闘隊型に入った。我が陸攻隊も、編隊をせばめ、爆撃態勢に入った。零戦隊と英空軍戦闘機隊の凄まじい空中戦が始まった。我が方の零戦は強い。次々に火を吹いて落ちて行くのは、英軍機ばかりである。陸攻隊も、敵戦闘機の襲撃を避け、美事な隊型で、爆撃針路に入り、正確無比に六〇キロ爆弾の雨を降らせた。下界の目標が次々と、物凄い爆発を起している。万歳万歳である。今思い出しても、下方に見える印度特有の建物が、はっきりと目に浮んで来る。思い出の爆撃行であり、我が方は、全機無事帰還した事を覚えています。

マレー・スマトラ島で、連日印度洋の哨戒を続け、比較的のんびりとしていたが、南太平洋の戦局が急を告げ、第一次トラック島、敵攻撃の報で、吾々はトラック島に向け、移動を開始した。途中、ペリリュー島で少しの間日を過した。戦後、ペリリュー戦記を読み、ペリリュー守備隊の勇猛さと斗魂には、頭の下る思いでありました。

＊玉砕のグァム島より奇蹟の生還

昭和十九年春、第二次攻撃以降、トラック島の残存機は完全という迄に叩きのめされ、残った飛行機の部品等で、整備された飛行機でトラック島、グァム島を往復、グァムに集結をはかり、陣容立て直しに懸命に努力していた。

戦局の悪化は、日に日に進んでいたが、未だ当時は、此の静かな島が、旬日後には炎の島と化し、やがては玉砕の運命を辿るとは、神ならぬ身の知る由もなかった。しかし、此の島にも、やがては猛攻撃の近い事は、予測されたので、宿舎に程近い、小高い丘の下に、頑強な防空壕を掘る事になり、堅い岩石に隊員全員が、夜を日についでダイナマイトとつるはしで、人海戦術をとり、急ぎ掘りに掘ってほぼ完成に近づいた頃、忘れもしない十九年六月十一日がやってきました。

防空壕掘りの疲れをいやす為、宿舎前の休憩所で一服やっていた時、遥か東の上空に、二機の戦闘機がこちらへ向

って飛んで来る。別に気にも止めず、味方の零戦位に思っていたが、ひどうもおかしいぞ」と思うと同時に急降下し、吾々目がけて一斉銃撃してきた。敵グラマンの地上攻撃である。「それ、防空壕に避退せよ！」と言う事で、一目散に地上に伏せたり、椰子の木蔭に身をかくし、ようやく防空壕へ辿りつくことができ、ほっと一息した。皆で無事を喜びあい、「防空壕が間に合ってよかったなあ」と肩を叩いて喜びあった。岩を掘った壕であるので、頑強そのもの、非常に安心であった。

此の空襲をきっかけにして、戦爆連合機で、来るは、来るは、さすがの壕も、地響きと轟音で凄じいものがあった。飛行場にある陸攻機の安否が気にかかる。翌日も、前にも増した激しい空爆である。一夜明けた翌朝、前方アブラ湾見晴岬海上には、敵第七〇七機動部隊が不気味に海一面を覆っていた。

夜が明けると同時に、艦砲射撃と戦爆連合の空からの猛攻撃である。何とか飛び立った零戦は、次々と火を吹く、我が方の地上砲火も勇敢に戦ってはいるが、多勢に無勢、飛ぶ飛行機をなくした搭乗員は、愛機より二〇粍機関砲を取りはずし、武器の無い者は、竹やりや鉄をとがらせたものを持ち、守りの態勢を作ったが、如何にせん、淋しい限りであった。吾々の生命である飛行機なしで搭乗員が地上で竹槍をもって死ぬのか、只々惜しさで歯がみし、いよいよ玉砕の時が来た!!と誰もが覚悟をきめた。

これと同時に、テニアン、サイパンも、敵主力艦隊の猛攻を受けている事を知り、艦砲射撃や爆撃音まで、かすかに、悪夢の様に聞えた。目の前で敵機が撃墜されると、パッーと落下傘で飛び下りる搭乗員を、潜水艦が、ポカッと浮び上り、或は、飛行艇が悠々と着水して、救助していく、口惜しい！だが、悲しい哉、手おくれは出来ないのである。海空からの猛攻によって基地は殆んど無力化してしまった。

私は、急に胸の痛みを覚え、軍医の診断を受けに小高い丘の上の医科に行った。スマトラ島索敵に出た際、エンジン不調のため片発飛行で、南海の小島に不時着したが、その時、胸部を強打したのが原因らしく、大した事はないとの事ではあったが、困った事に分隊防空壕に帰れなくなってしまった。玉砕するにしても、戦友と共に、最後まで戦って散りたいと思い、激戦の合間、夕暮れの赤い西の空を眺めながら、北の遥か彼方、母国日本の親兄弟に、心の中で、別離を報告し、アブラ湾を眺めながら、涙を流して、空爆の合間に感傷にひたった事を思いおこす。何としても飛行機乗りが、飛行機でなく、地上で死なねばならぬ事は、耐えられない淋しさであった。

だが、運命はわからないもので、六月二十日、グァム島の搭乗員は何としても救おし、再度日本国の防衛に当らせるべく、「潜水艦を送るから、それで脱出せよ」との命令で、現在生存者、大沢武分隊士が計画を練り、編成をされた。小生も脱出者名簿の中に加えられた。

イ号潜水艦の浮上個所と、時間に合わせるべく、飛行場からブカナ湾まで、トラックに分乗し、途中、三回～四回の艦上機襲撃を、林や木蔭に身をかくして避け、無事港に着いた。

大発船に乗り込み、敵の空襲を怖れつつ、千秋の思いで、浮上地点を回り乍ら、しばしの間待った。今、敵の襲撃を受ければ、無抵抗の中に全員戦死である。薄氷をふむ思いで、只々神に祈った。吾等の心を神も聞き届けてくれたのか、と、前面に、ポッカリと、イ号潜水艦が浮上した。「それっ」と云う事で、順序よく、正確機敏に全員乗艦した。

「敵襲！」の報で「急速潜航する、先に体だけ飛び込め!!」と云うので、ハッチから豆でも流し込む様になだれ込んだ。身の廻り品や重要書類は、全部海面に取り残されてしまった。またたく間に、艦は潜水し、深度をぐんぐん増す。ようやく射程外に逃れた。

体だけでも生き延びることができた。何という幸運に恵まれただろうと思うと同時に、未だ未だ安心出来ない、とか、島に残された戦友が、これから、どんなに苦しい戦いを続けるのか、とか、想いは複雑で、只々、武運を祈りつつ、グァム島を離れた。

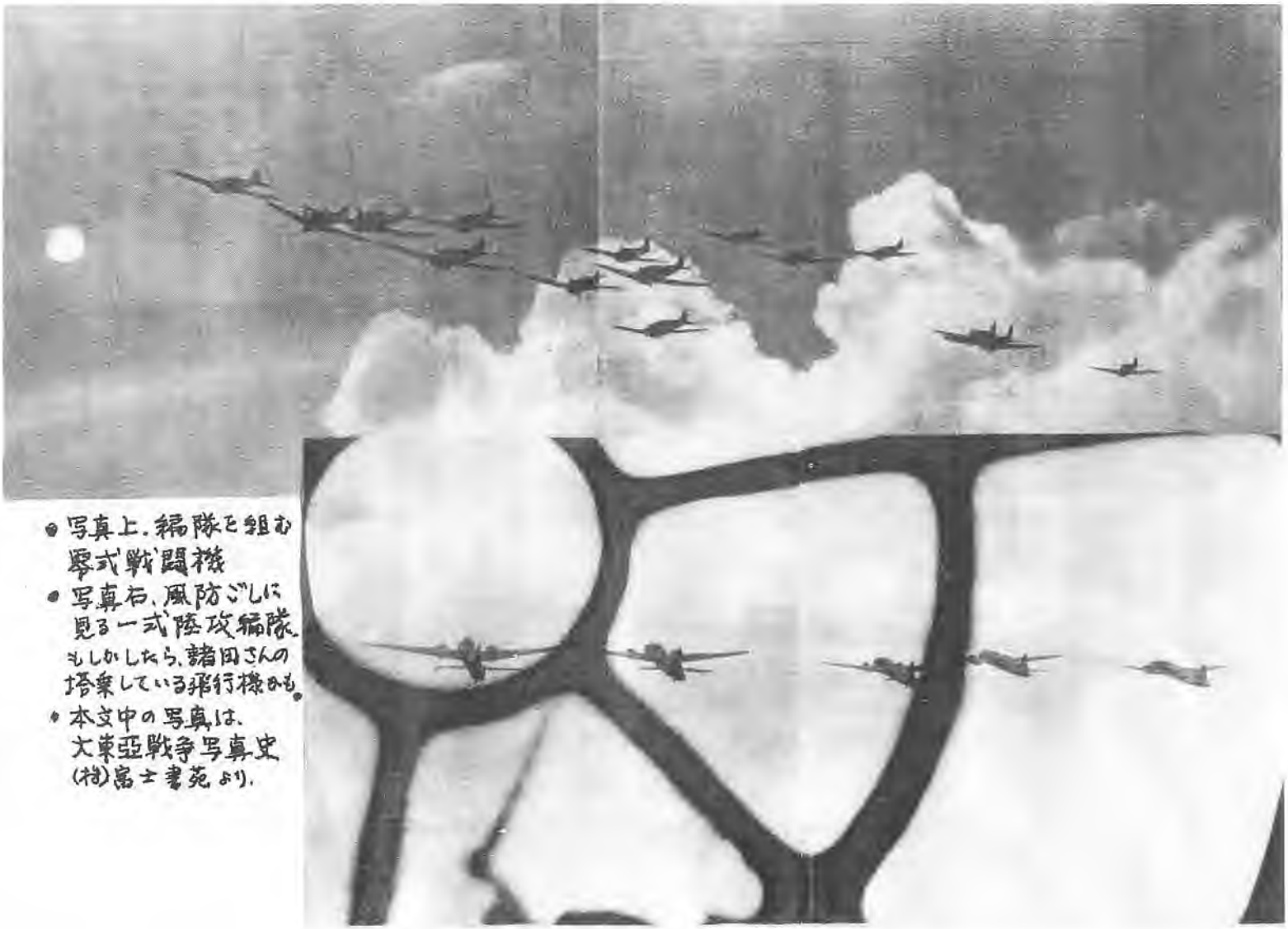
ホッとすると、一時放心状態になり、それ以後、日本に着くまで、海の底の狭い艦内も苦労に思わず、一週間目に、九州別府港に入港し、大分航空隊の門をくぐった。宿舎に着いてくつろいだ時、ようやく、「俺は生きているんだ、日本へ帰ったんだ。」と云う実感が湧き上り、一人で、大声を上げ、思う存分泣き叫びたい様な心境になりました。

戦後、三十年を経過した今日、大沢さん、三瓶さん及び戦友諸氏と再会出来、グァム島生還の話に花が咲き、今更の様に、今昔の感を深くしています。只、急速潜航の際、東南アジアや、ソロモン航空戦の戦記である航空記録を流出したのは、かえすがえすも残念に思いますが、生き残りの戦友諸氏の話の中から、七〇五空の戦史がよみがえり、当時の体験が再び憶い浮んでくる事と思っています。

記憶も不確かな小生が、ただ〳〵想い出を辿りながら拙ない文を綴りましたので、皆様方の卒直なご批判とご修正をお願いし、擱筆いたします。

昭和四十九年二月十三日　記、

川根本町久野脇在住、



● 写真上、編隊を組む零式戦闘機
● 写真右、風防ごしに見る一式陸攻編隊。もしかしたら、諸田さんの搭乗している飛行機かも。
● 本文中の写真は、大東亞戦争写真史(株)富士書苑より。

編集室より

「南太平洋の戦い」ご覧いただき、皆さん何を感じられたでしょうか。実はこの文は、著者の諸田さんからふる里通信に寄稿されたものではありません。今年二月頃、上長尾の森下武次さんから、「同級生の貴重な手記だ。しっかり読んでもらいたい。」と、紙色のあせた原稿用紙二十枚のぶ厚い綴を貸してもらいました。太平洋戦記……とにかく読んでみよう……と、読みはじめました。長文でしたが一気に読みほしました。

『これは大変なものを見てしまった。どうしよう。どうしたらいいのか……』熱いものがこみ上げて来て、涙が止まらない。高等科を卒業した少年が、四年余の歳月を戦場で、命をかけて日本国の為に戦った真実……。百が一……、百人の兵隊さんが命を落とし、一人生き残った体験記に値する尊い記録です。諸田さんをは、町民誰もが知っているのに、この体験を知る人は、ほんの一握にすぎないだろう……。私一人の胸の内にしまっておくには、あまりに重すぎ、思い切って、ふる里通信に載せようと考え、一気に書き上げました。

諸田さんは、終戦後三十年の時、所属部隊の太平洋戦史編集用資料としてこの文を書かれました。そして又、歳月は流れ、三十余年過ぎた今日、諸田さんは八十歳をこえられ、近年、体調がすぐれないと伺っております。早く元気になっていただきたいと思います。

今、企画"太平洋の戦い"を載せるに当り、家蔵の戦争本を読みあさり、太平洋でくりひろげられた戦争のすさまじさ、身の毛のよだつ無惨な写真、戦争の為に死んで行った人々、島もふっ飛ぶ猛攻撃……出来る事なら見たくない本や写真に向かいました。六十三年の平和には、太平洋戦争の日本国中を巻き込んだ犠牲が土台になっている事を忘れてはなりません。

余録　森下武次さんの話

- 義兄の榊原正行さん（水川）は、海軍で、山本五十六元帥の従兵で、元帥と行動を共にしていた。言うに言われぬ事もあるが、山本元帥の遺骨は、榊原さん達従兵の手で祖国に帰った（北海道上陸 ⟶ 東京へ）

山田栄一さんの話

- 応召でブーゲンビル島整備兵として、昭和18年から終戦まで島に滞在、山本元帥の棺は、山田さんの隊で用意したという。元帥と従医兵の遺体以外はほとんどブイン沖海中に落ちたという。

辻野欽三さんの原稿より

- ふる里通信No53、戦艦陸奥「爆沈」の謎を追跡」にて原因は「三番砲塔」の過熱から火薬庫の爆発ではないかと、乗組員1478人中253人が生存した。生存兵士は激戦地に配属され、辻野さんはトラック島となる。菊川丸火災事故に遭遇するも、九死に一生を得る。陸奥の乗組員で、生き残った数少ない方である。

※中川根出身の兵隊さんが、奇しくも、山本元帥も南太平洋激戦場にて運命（生涯）の糸がつながるようになっていた事が何とも不思議であります。

小山のトンネル

大山市　柏井愛明

あれは昭和二十年の春頃だったろうか。私達の東川根村国民学校に海軍の兵隊さんがやって来た。数は判然と記憶していないが、数十名だったと思う。学校の校舎は徳谷神社の横の広い運動場の北側に建っていた。

木造二階建てで青ペンキが塗ってあり、当時としてはモダンな方であった。石段を降りると寄宿舎があり、小猿郷幡住などの遠い地域の生徒が泊って通学していた。子供達が泉水と呼んでいた池があり、体操の時間は裸足で授業するので終るとここで足を洗うため、池の水はたちまち土色になって終う。飼われている鯉はたちまち酸素不足となり、パクパクロを開けて苦しそうだった。

その池を囲むように、二列の杉皮ぶきの屋根の古い校舎がありました。教室には裁縫室とか工作室の札がかけられていた。大正の初期あたりに建築したものか、映画「二十四の瞳」に出ていたい豆島の分教場みたいな、矢絣に袴をはいた女の先生がそこに立ったら、ぴったりきそうな古い教室でした。

小使いさん（用務員）のおじさんは、始業と終業の時間には鐘を振って坂を登って来た。

その古い校舎に軍隊の兵達が居候して寝泊りを始めたのです。一番若い兵は十五才ぐらいかな。そんな馬鹿なと言わないで下さい。

当時数え年二十才（満十九才）になると、徴兵検査を受け、甲種合格となると赤紙といって召集令状が町や村の役場から届いたものです。

それより幼なくても志願兵という制度があったのです。それにしてもこんな山の中に、それも陸軍ではなく、海軍の兵が？と私は疑問に思いました。

連合軍（アメリカ・イギリス・オーストラリアなど）の海軍にも海兵隊といって陸戦部隊があり、日本海軍の場合は陸戦隊といった。しかし、後から考えれば乗る艦船が無かったのだ。

小長谷長門守が守っていた小長谷城趾と校舎の間には崩れ残った城の壕があり、学校から出るゴミはそこに集められて焼却処分されていた。そこへ五右衛門風呂の釜のような、大きな鉄釜でごはんを炊き、食事が済むと隊列を組み、スコップやつるはし等をかついで、どこともなく出掛けて行く。一体どこへ行くのだろう。行き先のうわさは友達が云うには、どうやら桑野山を過ぎて、大井川沿いに細尾から橋を渡って小山のトンネルまで、毎日歩いて往復十二、三キロを通っているらしい。

大井川発電所（崎平）が昭和十一年に完成し、そこへ導水する為の大井川を堰止める堰堤（奥泉堰堤）が出来、上流部からの川狩り材木が、堰堤にて水揚げされ、陸上輸送（川狩り補償）の為に、千頭駅から奥泉堰堤まで、軌道が敷設され、電力会社

（大井川電力㈱）から国営日本発送電に引き継がれ）の補償により東海パルプ株など木都島田へ陸路の材木輸送の為に鉄道が敷かれた。

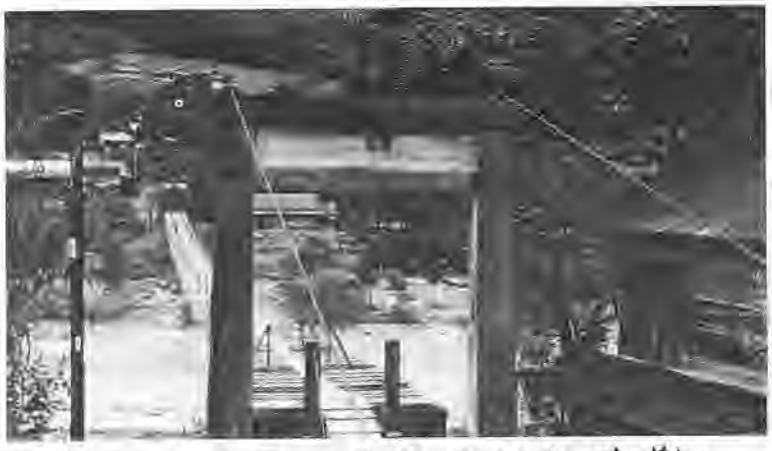
その鉄道の小山駅を過ぎて奥泉駅に向った最初のトンネルは、何故掘り直したか判らないが、眼鏡のように二つある。その掘りかけて中断したトンネルを利用して倉庫を作り、目前に迫った本土決戦に備えて、食糧その他の物資および武器弾薬を密かに運んで集積しているようだとの明らかに口外できぬ情報が洩れ伝えられた。

戦闘帽に黒い線が二本入った下士官が、未だ母親に甘えていたいような年頃の少年兵を、これでもかとばかりに鉄拳でビンタを加えるのを何度か見た。風邪をひいて熱がある者もいるだろう。下痢をして身体のだるい兵もいるはずだ。韓国や台湾出身者も混じって故郷の夢を、家族の夢を見ながら毛布にくるまっていたに違いない。ただ救いは、彼等は命を落すことなく、ふるさとへ帰ったであろうということだけだ。そこには焼野原と化したわが町が、爆撃や艦砲射撃で待っている肉親が亡くなった者もあろう。しかし、戦いすんで、どこかの町や村で幸せに生活していると思いたい。

昭和二十年八月十五日朝、隣組の組長さんから各戸へ伝言（言い継ぎといった）があり、「正午に重大放送があるから全員聞きもらさないように」とのことだった。

当時の並四というラジオは雑音がひどく、電波もあまり捉えられなかった。十二時の時報と共に今上天皇が重々しくメッセージを読み上げたが、ピーピー、がーがーという雑音に混じって、音が大きくなったり、小さくなったり、子供には教育勅語より難解な言葉で、今でも覚えているのは「豈朕が志ならんや」と「耐えがたきを耐え、忍び難きを忍んで」の二言のみである。

沢間の横内商店の近くに住んでいたおみき山と言う男が、終戦から一週間たった裏盆の二十四日、猟銃をかついで吊橋を渡って来た。後から聞いた話では、伐採後の焼山畑の仲間はずれにされたとか、その恨みを晴らそうとしたものらしい。滝波（国）さんは、昼ごはんを食べに桑野山の畑から、わが家へ帰るところだった。私の家の横にさしかかった時、「ちょっと待て！」と言う声と同時に、バーンと銃声がした。滝波さんは、わが家のとうもろこし畑のお蔭で一命を助けられた。彼は、わが家の庭を横切って、大井川の方へ逃げた。―写真は沢間、桑野山間に架かる川根橋―



と、猟銃男は吊橋へ引き返し、吊橋の上から人違いをして、義を着て魚釣りしていた人に発砲した。運よくこれもはずれたが、釣人はあの五月二十九日、B29からパラシュートで平栗へ降下した米兵に、ピストルを発砲され、脇を銃弾がかすめたあの中村竜一さんである。

子供の私は、とうとう進駐軍がやって来て、殺りくが始まったと震え上るほどの恐怖を覚えた。

秋になって、あれは何月頃であったろうか。役場を通して小山のトンネル倉庫に運び

あつに物資の配給があった。五、六キロ位の米と果物の缶詰、外にこまごまとした物、中でも、米と同じように嬉しかったのは天竺木綿の二、三反の布地であった。母は手縫いでワイシャツを作ってくれた。あの物資は川根七ヶ村といわれた他の人達にも渡ったかな？

＊…＊…＊…＊…＊…＊…

五ページの続き。

＊長島ダムの建設目的と一つ、洪水調節について説明を加えます。―長島ダム。国土交通省パンフレットより――

『長島ダム諸元』『洪水調節機能』について。

＊大井川における洪水調節機能の概要

基準地点である神座における基本高水のピーク流量一二、五〇〇㎥/sを長島ダムを始めとする上流ダム群によって二、〇〇〇㎥/sの洪水調節を行うものとします。

このうち、長島ダムにおいては、ダム地点の計画高水流量六、六〇〇㎥/s（百年に一度の確率）のうち、一、六〇〇㎥/sの洪水調節を行うものであります。

長島ダムでは最大放流量を五〇〇㎥/sとし、調節方法は、一定率一定量方式とし、洪水調節開始流量を九〇〇㎥/sとしました。

現在、下流域の状況にあわせて計画高水流量四、八〇〇㎥/s（四十年に一度の確率）として、二、五五〇㎥/sを調節し、計画最大放流量二、二五〇㎥/sとし、暫定操作を行っている。

と言いてありました。今回、台風四号による大井川の状況をお知らせするに当り、長島ダムによる洪水調節機能は、何のためにあるのかを、一人でも多くの人々に知っていただきたく非常に難解な文章ではありますが、載せてみた次第です。百年に一度、四十年に一度の大洪水時の対応基準をもとに六門の洪水吐（門最大一〇〇〇㎥/s）の操作一つで、川根本町大井川沿地区は流出の危機にさらされています。大井川の本当の力をあなどらないでほしい。小笠山東側をつくり、牧之原台地をつくり、志太平野をつくった大井川です。三十二のダムが存在する（河川の流れを堰止める）大変複雑な大井川でしょうが、何らかの策を取り、特に、畑薙ダム・井川ダム・長島ダムは、各ダム間の連携を取って大降雨地帯の川の性質を知って、洪水予測を早くキャッチして、大型ダムから早目の放流を行って、大井川を自然流に近い状況にしてほしいと願って止みません。ダム放流による鉄砲水は、もうごめんです。　以上

83号84号同時発送となります。84号はかたよりが多く、読む人によっては、読みにくい通信になってしまいました。次回からは又、さわやかなふる里の風をお届けしたいと思います。

＝定期購読のお願い＝

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共　200円

皆様の定期購読が、このふる里通信の発行を支えます。年4回の発行を予定しております。皆様の支えがあれば100号まで発行したいと考えております。購読料が切れた方には、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読いただきたく、お願いします。もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非、ご連絡下さい。

発行責任者　〒428-0313
静岡県榛原郡川根本町上長尾859-6
小澤節子
TEL　0547-56-0015
FAX　0547-56-0020
郵便振替口座
00870-4-81556